

吉本隆明全著作集

9

吉本隆明全著作集

9

作家論 Ⅲ

勁草書房

吉本隆明全著作集 9

昭和五〇年十二月二十五日第一刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 井村寿二

発行所 勁草書房

(東京都文京区後楽二の二三の一五
電話番号東京八一四局六八一 郵
便番号一一二 振替口座東京五一
七五二五三番)

印刷所 精興社

製本所 青木製本

* 定価は外函に表示してあります。

© 1975 by Takaki Yoshimoto

目

次

第Ⅰ部

〈原像〉……………七

〈戦争〉……………三四

〈家族〉……………九一

〈日常〉……………一五

第Ⅱ部

聖と俗……………一八

島尾敏雄遠近法……………二五

〈関係〉としてみえる文学……………二九

恥について……………二三

*

島尾敏雄『琉球弧の視点から』……………二六

島尾敏雄『日を繋げて』……………三二

島尾敏雄『夢の中での日常』	三六
井上光晴『書かれざる一章』	三六

第Ⅲ部

島尾文学の鍵	三七
傍系について	三一
あとがき	三五
島尾敏雄年譜稿	六七
解題	三三

作家論 Ⅱ

吉本隆明全著作集

島尾敏雄

第 I 部

〈原像〉

島尾敏雄の初期作品のうち、わたしがとくに関心をそそられる作品が二つある。ひとつは「原つば」であり、もうひとつは「日曜学校」である。いずれも長崎高商在学時代にかかっている。

わたしたちはあるひとりの作家の開花する以前の作品に接するとき、いつもしらずしらず後年の〈予兆〉をみつけたそうとして遡行しているものである。あ、すでにこんなときから、こういう世界に関心をむけていたのか、というように。だから作品を作品としてよんでいるのではなく〈資質〉の世界としてよんでいるのだ。かれの〈資質〉はどういうことに眼ざしをむけていたか、それは後年どんな形でかれの作品のなかに開花し、また変貌したか。そして、もうひとつつけくわえるとすれば、わたしたちは、かれの〈資質〉の世界のうち何を本来的なものとみなすか、というような問題がここに集約してあらわれる。

わたしはここで、島尾敏雄の〈資質〉の世界の中枢を、〈関係〉の〈異和〉という点にみとめてゆ

きたい。このばあいの〈関係〉は人間と人間との関係のことであり、人間と自然との関係のことではない。こう断らなければならないのは、島尾敏雄の作品の世界で、自然にたいする緊密な混融感、人間にたいするときの、あの陰暗な果てしない異和感とまるでうらはらに、いわば地誌的な存在感ともいべき特質を形づくっているからである。

作品のなかで人間との関係に眼ざしをむけると、かれの意識は、いちども〈他者〉としっくりと同時に出遇うことができない。遅ればせに〈他者〉に出遇いにゆけば、〈他者〉の貌はすでにじぶんの方へ向いてはおらず、早や目に準備をととのえれば、まだ〈他者〉はじぶんの意識や行為にむかって到達していないといった具合である。こういう関係意識のちぐはぐさは、たれもがいつでもどこかで遭遇しているありふれたものにちがいない。そしてふつうはふたつの方向に分極する。おおくのひとはこの関係意識のちぐはぐさを〈忘却〉によってとびこえる。かれはちぐはぐでない人間と人間との〈関係〉だけをえらんで、この世界の連鎖をつくるのだ。しかし、もうひとつのちがったひとびとは、このちぐはぐさを拡大する方向にむかう。かれがそう考えたからこの世界の〈事物〉はそのとおりに実現されたのだという妄想の連鎖をつくるとか、かれがそうしたいと思ったから〈他者〉もまたそう考えたというような考察察知の連鎖をつくってこの世界を再構成する。そして人間と人間とのつくっている世界で、もし〈不幸〉な意識というものがありうるとすれば、それはこのいずれをもえらばないで中間にとどまりながら、しかもこのいずれの分極をも踏まえて佇ち

とまっている意識をさすにちがいない。

初期作品「原つば」のなかで、少年貫太郎は、カーブのところで速度をゆるめた弘明寺行き電車に飛乗りの冒険をやったのける。これは少年がたれでもやってみたがる無作為な好奇心と冒険心である。飛乗った貫太郎は回数券がないことに気付く。そして車掌に切符をおとしたと訴える。これもまた少年がたれでもとりそうな態度である。車掌は待つておいでと云ったまま、何度もじぶんの前を通りすぎるのに、切符をくれるでもなければ、降りろともいわない。ここらあたりから、車掌や運転手の象徴する〈大人〉の世界は、少年にとって了解できない世界の象徴に転化し、少年には不安や後悔や罪の意識となってはねかえってくる。なぜ車掌はじぶんに切符をくれて、このつぎからは注意するのだよ、というか、切符がないのなら、つぎの停留所で降りなといわないのだろうか。じぶんの前を何度も通りすぎるのに、なぜじぶんの存在を忘れてしまったように、素知らぬ顔をして行ってしまうのだろうか。〈大人〉の世界は、子供にはわからない速さと方向と流れがあつてつくられている別の世界ではないのか。少年が不安になり後悔し、強迫感をかんじるのは、この〈異和〉感のためである。すでにここから人間と人間とは、けっして幸運に同時に貌と貌をむけあって、心と心を対にして出遇うことはないのではないか、という作者の関心が支配しはじめる。人間と人間とはいつもちぐはぐに、遅れるかあるいは尚早に出遇うよりほかない。それがこの世界の成立ちにとってもっとも根本的なものではないのか。

「原っぱ」の作者は、まだきざしにすぎないとはいえ、〈関係〉意識が分極してゆく岐路へ熱心な関心をしめしている。この地点は危うい世界で、どこまでもたどってゆけば、関係妄想や考察知の連鎖で世界をつくりかえてしまう陥穽がまちうけているはずである。

わたしたちが、きっとそうなるにちがいないと思っていると、そのとおりの〈事実〉にぶつかったという心的な体験をしたとすれば、それははじめに〈関係〉意識の〈異和〉感から発している。ほんとうはこのばあい、たんにひとつの〈事実〉と、〈関係〉の〈異和〉だけをえらんで連鎖している〈意識〉とがあるだけである。しかし、ひとたび危うい世界にはいりこんだ意識には、じぶんがそうなるにちがいないと思っていると、そういう〈事実〉がほんとうにやってきたとしかかんがえられないのである。このような短絡の根源には、はじめに〈関係〉の〈異和〉が存在しているのだ。そしてこの〈異和〉感の根柢には、まだ意識されない〈不安〉がよこたわっている。

少年貫太郎は、家にかえると母のまえでわっと泣きだし、切符をおとしたと母にうったえて、母から切符をもらうと、派出所へ戻しにでかける。「派出所のおぢさん」は、ただ「あゝさうですか、わざ／＼御苦労さん」と云って切符をうけとり、貫太郎の気持もすつと晴やかになる。しかし、島尾敏雄の後年開花した世界を、この場面にあてはめてみるとすれば、少年はけっして「すうつと晴やかな気持」になることはないのだ。少年がやっとの思いで、途中でいじめっ子をかわしながら切符をとどけにいてみると、すでに〈大人〉たちの世界では、先程、カーブのところで弘明寺行き

の電車に無鉄砲に飛乗りをやり、切符をもっていないと訴えた少年があったことなど忘れられている。そのことに少年は傷つかねばならない。人間と人間との〈関係〉はこういう無数の、たれのせいでもないちぐはぐさによって、傷つけあってしか存在しえないのではないか。この人間の世界は、それぞれの生来もっている固有の時間の流れによって、異った速さでお互に出遇ったりすることなく、ばらばらの方向に走っているにすぎないのではないか。たまたますれちがう瞬間に〈他者〉の姿を垣間見たとしても〈他者〉はその内在を了解するひまもなく、また遠ざかっていってしまうのではないか。

少年はまだ幼なく、それを描いている作者はまだ未熟だという理由で、「原つば」のなかの人間と人間とのあいだの〈関係〉の〈異和〉は、〈大人〉の世界と〈子供〉の世界とのたがいに了解できない流れの差異としてしかとらえられない。だからある日常の挿話のなかで、少年の心が出遇う不幸が鮮やかに浮びあがってくるだけである。

「原つば」のなかのもうひとつの挿話では、作者は遅れるか尚早にしか出遇うことができない人間と人間との〈関係〉の在り方にもっと具体的な関心をよせる。

少年貫太郎は原つばで、日頃あこがれている年上の少女、万年房枝が仲間たちと縄飛びしているのを傍でみている。少女のほうは貫太郎にたいして、いつも冷たいのである。少女が縄飛びで櫛を落とす。貫太郎は、少女にそれを告げたとき「持つてゝよ、貫ちゃん」といわれて、飛上るほどよろこ